

最優秀作品賞

いのち預金

渡辺 恵子

あれは今から三十三年前。私が三十二歳の時だった。その頃の私は、時々襲ってくる片頭痛に悩まされていたのだが、まだ幼稚園児だった息子に手がかかり、頭痛なんか誰でもよくあることだと気に止めずにいた。そんな日々が続いていた、ある日のこと。夫に、人間ドックを受診するように促された。返事を添える私に、夫は声を荒げた。

「今、君に、もしものことがあったら、幼い息子が可哀想だとは思わないのか！」

私は一瞬、言葉に詰まった。心のどこかで、深刻な病気が見つかるのを恐れていたのだ。

夫の剣幕に押されて二週間後に、しぶしぶ病院に向かった。すると、血液検査の結果、数項目に異常値が出た。それに視力障害と、視野欠損。急遽、脳のMRIを撮ったところ、中枢部に腫瘍が見つかったのだ。

……受診せず、このまま放置していたら……。

私は、思わず身震いした。と同時に、夫に言われたキツイ一言に、心から感謝した。

初期段階で発見できたお蔭で腫瘍も小さく、術後も順調で、短期間で元気に身体に戻れた。

——若いから大丈夫。そのうち治るだろう——。

そんな安易な希望的観測は、いのち取りになるということを、私は身を持って体験した。

この出来事があったから、私は夫の会社の健康保険組合の恩恵にあずかりながら、毎年人間ドックを受診するようになった。

それから数年後に、父が脳出血で倒れた。

父は健診を一度も受けたことがないことを自慢に思うような人だった。搬送された病院で、主治医から、「もっと早く病院で診てもらっていればねえ」と言われ、私は無念で胸が潰れそうになった。父は、「病気があっても、知

らんままコロッツと逝くんじゃ」と豪語していたのに、現実は何年も闘病生活を余儀なくされ、苦しみながら六十七年の生涯を閉じた。

毎年受診していても発見できなかったり、進行が早く、死に至る人がいるのも事実だ。

でも早期発見で助かる確率が格段に上がり、私のように完治する人が沢山いるのも事実だ。

ほんの少しの勇氣があるかないかで、人生の明暗がくつきりと分かれてしまうことがある。

たった一年に一回だけの身体のチェックを怠ってしまったために、一生苦しみ、後悔し、かけがえのない家族に悲しい思いをさせるようなことは、私は絶対にしたくない。

今年、夫が退職して年金生活に突入してから八年目を迎えた。

——もったいないから、今回はやめておこう——。

という気持ちにならぬよう、健診代のために私たちはお互いの貯金箱を用意して、五百円玉をせっせ貯め込んでいる。この貯金箱には私たちの未来のいのちが詰まっている。

五十代までの私は、子どもに不憫な思いをさせないために、家族に迷惑をかけぬようにとの思いで、人間ドックを受診してきた。

そして今は、夫婦で少しでも長く質のいい生活が楽しめるように……。

まさに人間ドックは、「いのち預金」だ。